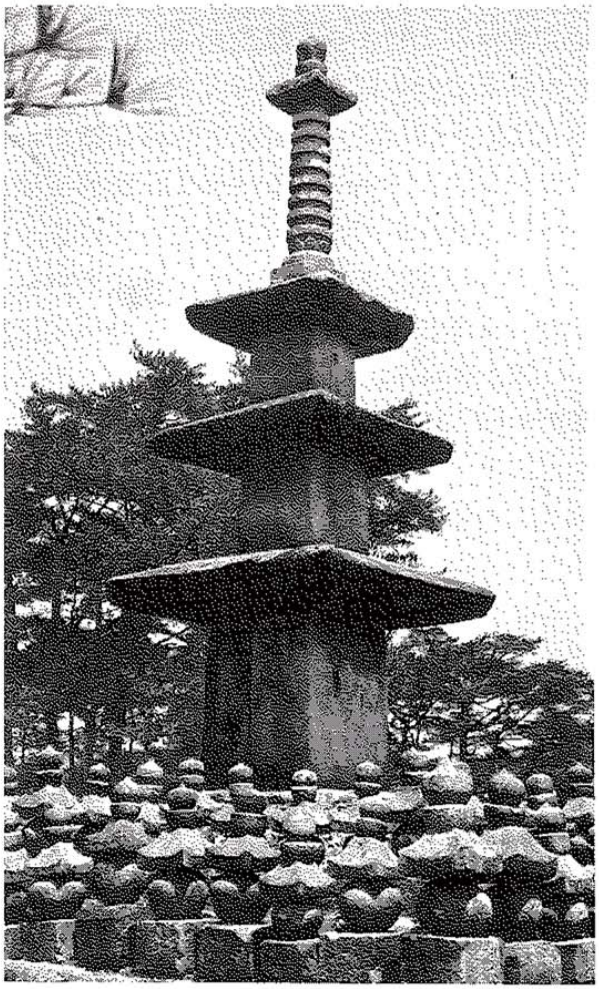
近江の石造層塔

石塔寺三重塔

近江にある石造の層塔というと、何といってもわが国で最古最大といわれている蒲生町石塔の石塔寺三重塔をとりあげることになります。

「昔、中国に修業中の寂照という僧が、清涼山の蓮池のほとりで早朝から読経に余念のない僧達を見て、その由を尋ねますと、『日本国蒲生県の阿育王塔を礼拝しています』とのことです。寂照も読経に加わって一心に念じていますと、たちまち石の塔が池にうつりました。寂照がこの不思議な出来事を日本に伝えますと、時の帝はさっそく蒲生に石塔を探させました。領主の連れて行った犬が盛んに吠えるので、そのあたりを堀りますと光を放った石塔が現れました。」



▲石塔寺三重塔

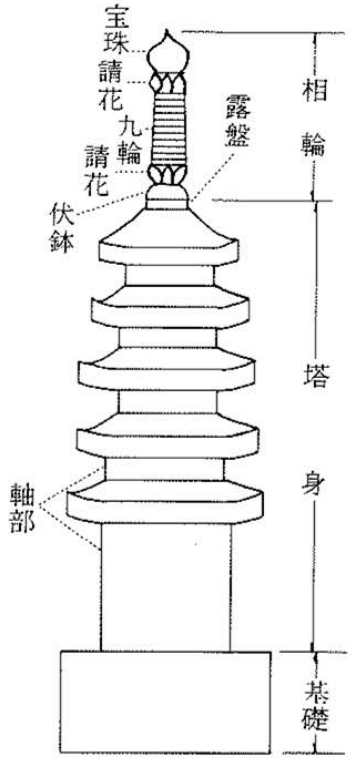
こんな伝説がある石塔寺三重塔は、高い石段を登りつめた広場の中央に、群塔を従えて大空にそびえたって、雄大でどこか異国調を漂わせています。天智天皇の時代に百済の帰化人が蒲生郡に移住したといいますから、これらの人々が寺を建て、この石塔も建てたものと思われます。塔の高さは約7メートル、奈良時代前期の作と推定され、重要文化財に指定されています。

この時代の石塔は、加工のしやすい凝灰岩やそれに近い柔かい石で造られましたが、石塔寺三重塔は硬い花崗岩で造られています。塔身の初層軸部が1個の石でなく縦に2枚合わせてあるのも珍しく、有名な韓国・扶余の長蝦里の層塔を簡素化したと思われる程で、屋根もそれに似て大陸的です。ただ、屋根の軒下が、長蝦里のものは力強く2段に造られているのに対して、石塔寺のものは段が薄くあるかないかに造られ、屋根の曲線が軽快に伸びているあたりに日本的な味を見せてくれます。相輪は後世に造られたものですが、この石塔を眺めていますと、朝夕、これを拝しながら遠く故郷を偲んでいた古人の心情がひしひしと身に浸むようです。

層塔について

層塔というのは、三重以上の屋根をもった塔で木造か石造が普通です。塔とは卒堵婆のことで仏舎利（釈迦の遺骨）を納める塔から発展して来たものといい、寺院の建物中でも重要な位置を占めるようになりました。（石

塔寺三重塔では、三重目の軸部に仏舎利の納入口が見られます。）



石造層塔には、三重・五重・七重・九重・十一重・十三重があり、奇数を原則としています。平面は四角形が多いが六角形のものもあります。構造は右図のようになっていて、基礎は、側面が無地のものと、格狭間やその中に蓮花を意匠したものがあり、上部に蓮弁を飾っているものもあります。塔身は、軸に屋根を何重か積み重ねたもので、初軸部には仏を梵字で表わすか仏の像容を陽刻（浮彫）してあるのが普通で、ここが塔の中心とされています。二重から上は、軸部と屋根が１石で造られるものが多く、別々になっているのは古い様式と考えてよいようです。相輪は、伏鉢から宝珠まで１石で造られるのが普通で、宝珠の下の請花の所に色いろ装飾を施しているものがあります。

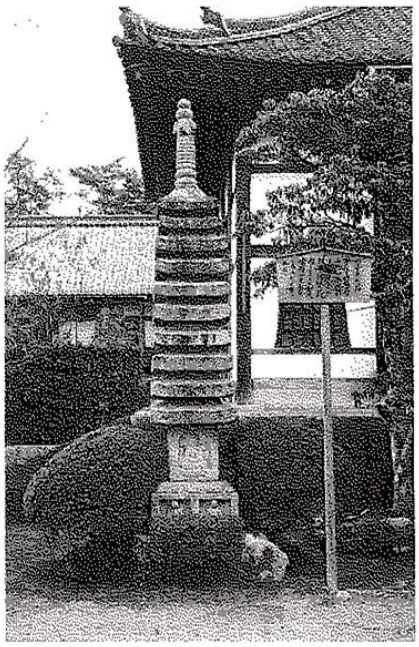
層塔あれこれ

栗東町安養寺の安養寺十三重塔（重文、現在は第九、十、十一重を欠く）は鎌倉時代のものです。（以下本文中に出てくる層塔は全部鎌倉時代の作です。） 基礎は珍しいもので、上部に復弁反花を飾り、側面のうち３面は格狭間だけですが、正面は２区に分け、それぞれに合掌する僧形２体を陽刻していることです。

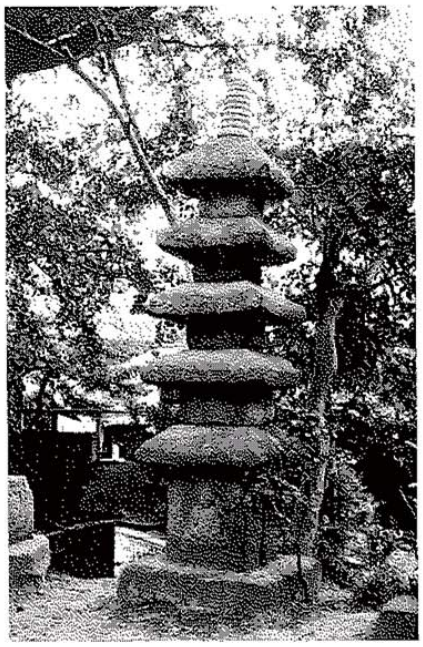
守山市には東門院五重塔（重文）があります。この塔は、石塔寺のものと同じように、初軸部が２枚合わせの石で造られている古い様式のものです。表面の２面に仏像を力強く彫り出し、屋根と軸部は別別の石で造り、屋根の勾配もゆるく軒反りも伸びやかな姿は、鎌倉時代前期に属すると思われます。その近く、勝部の最明寺五重塔（重文）も、東門院の塔とは少し時代はあとになりますが、良く古調を残しています。

石塔寺のある蒲生地方には、さすがに沢山の層塔があります。近江八幡市安養寺町の道路脇にある石造五重塔（重文）は、高さが4.35メートル、相輪は傷んでいますが屋根のわりに各軸部が太く少し異国的な姿がうかがえます。蒲生町には石塔寺のほかに、鋳物師に涌泉寺九重塔と下麻生に赤人寺七重塔の２基があり、いずれも重要文化財に指定されています。前者には初軸部に永仁３年（1295）の銘があり、屋根の軒先が厚い所に特色を見せています。後者には矢張り初軸部に文保２年（1318）の銘があり、相輪は失われていますが、前者と比較すると軽快な感じがします。このほか、蒲生堂の光明寺七重塔２基が本堂前の左右に建っている姿は、古寺景観の模型でも見るようで懐しいものです。上麻生の旭野神社七重塔も注目すべき塔で、初軸部に元徳元年（1329）の銘が刻まれ、その基礎に技巧がこらされています。それは、層塔には珍しい壇上積式で、上部に単弁の反花を飾り、側面は格狭間を造って、そのうちの２面に宝瓶三茎蓮を、１面に開花蓮を、いま１面に孔雀１羽を陽刻した賑やかなものです。このような造りは、ふつう宝篋印塔にあるものですから、あるいはこの基礎はそれのではないかと思われますが、それにしても軸部とよく合い全体が程よく釣合っています。

竜王町では、山之上の西光寺に２基の五重塔があります。庭園の塔には文保三年（1319）の銘がありますが上部が失われ、本堂前のは少し新しい時代のもので、これも上部の笠が抜けていますが、もとは七重ぐらいの塔だったのでしょう。大字駕与丁の地蔵堂七重塔は正安二年（1300）の年号がある塔で、こじんまりとよくととのっています。



▲安養寺十三重塔



▲東門院五重塔

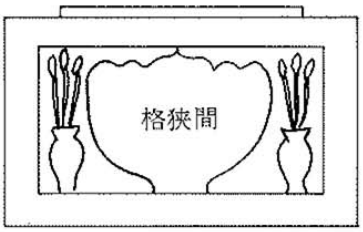
▲西徳寺七重塔

日野町には、町指定の猫田の禅林寺層塔と、中山の金剛定寺層塔があります。前者は、現在は四重ですがもとは五重だったと思われる古塔で、全体に風化がはなはだしく、つい見逃されそうです。後者は、初軸部と三重を残す不完全な塔ですが、建長四年（1252）の銘がある古塔の一つです。

五個荘町には、新堂の若宮神社層塔（町指定文化財）と石塚の八幡神社層塔があります。石塚のは正安二年（1300）の銘があり、新堂のはそれに近い時代の五重塔で可愛らしいものです。

彦根市には、田附町の八幡神社七重塔があります。基礎の意匠が珍しく、格狭間内の五茎蓮華の茎の上には仏座像が陽刻されており、永仁六年（1298）の銘も刻まれています。

米原町上丹生の松尾寺九重塔（重文）は高さが5メートル近くもある堂々とした塔です。この塔も基礎に特長があって、上部に初軸部を受ける一段高い方形の座をつくり、側面の3面には格狭間の左右に宝瓶三茎蓮を陽刻してあって、格狭間内に蓮飾（はすかざり）を彫るようになる過渡期を思わせる貴重なものです。残りの1面には文永七年（1270）の銘も刻まれています。また相輪上部の請花を方形につくり、それに四方仏を陽刻する手法など、初軸部の美事な四方仏の彫刻などと考え合わせると、名工の手になった力作と思われます。米原町では、近くの三吉にある町指定文化財の八坂神社九重塔（元亨三年・1323）も見忘れてはならないものです。



▲松尾寺九重塔 基礎

湖上の竹生島には宝厳寺五重塔（重文）が小塔ながらも整った美しい姿で建っています。また、木之本町赤尾の西徳寺七重塔は近江様式の特徴をよく表わしています。高島町拝戸の水尾神社層塔は全部揃っていないが仁治二年（1241）と刻まれており、紀年銘では古い塔です。

また、野洲町には久野部の円光寺九重塔（重文）と永原の常念寺五重塔（重要美術品）があります。どちらも不揃いで上部は宝塔や宝篋印塔の屋根を代用し、第二、三重は不足しています。しかし円光寺のものは康元と伝えられ、常念寺のものは正応元年（1288）の銘があって、鎌倉時代中期の作を知る好資料です。

（宇野健一氏提供）

近江の石造層塔一覧表（抄）

昭和51年４月調

名称	所在	推定年代	備考
月心寺層塔	大津市大谷町	鎌倉時代	十三重
〃	〃　〃	〃	九重（一重欠）
大日堂層塔	〃　黒津町	元弘２年(1332)	九重（初軸欠）
白山神社層塔	近江八幡市古川町	鎌倉時代	七重(二重、相輪欠)
迩々芸志神社層塔	〃　大房町	〃	四重（残欠）
天神社層塔	〃　浄土寺町	正和２年(1313)	七重(一重、相輪欠)
最明寺層塔	草津市木川町	鎌倉時代	五重
劔神社層塔	八日市市下羽田町	〃	八重（残欠）
日吉神社層塔	〃　今堀町	〃	五重（上部欠）
瓦屋寺層塔	〃　建部瓦屋寺町	〃	相輪補
大蔵寺層塔	〃　寺町	〃	三重
神田墓地層塔	〃　神田町	〃	〃
大日堂層塔	守山市川田町田中	〃	七重(一重、相輪欠)
天皇神社層塔	志賀町和迩中	〃	残欠
福正寺層塔	栗東町六地蔵	〃	六重（上部欠）
報恩寺層塔	野洲町南桜	〃	五重（相輪欠）
苗田神社層塔	中主町須原	〃	七重
法蔵寺層塔	〃　六条	〃	五重
八王子社層塔	甲西町菩提寺	南北朝時代	七重
専修寺層塔	蒲生町宮川	鎌倉時代	〃
慶岸寺層塔	〃　宮井	〃	〃（相輪欠）
正養寺層塔	〃　外原	〃	三重（〃）
高山神社層塔	浅井町高山	〃	五重（〃）
観音堂層塔	〃　〃	南北朝時代	〃
東光院層塔（３基）	西浅井町黒山	鎌倉時代	〃
信光寺層塔	安曇川町三尾里	〃	残欠
玉泉寺層塔	〃　田中三田	〃	相輪欠

（注）　本表は本文掲載の層塔を省略しました。